

「落語と私」 その四

三代目 橘ノ百圓

さて、名前が決まりますと、名入手拭、名入扇子の発注、披露宴会場の予約、新しい紋付袴の注文、披露時の配り物の手配、両協会とその会長、先輩噺家の皆さん、並びに、ご最良方へのご挨拶廻り等々、1年はアッと言う間に過ぎます。昭和44年4月17日と記憶しておりますが、上野精養軒で多勢のお客様をお招きして、三代目橘ノ圓 真打昇進披露宴を行いました。その日が大雨で大変でした。圓師匠は、早くに会場に入り、私は雨の中を車でオカミさんを迎えに日暮里へ、それから案内係で、真新しい圓の名入り法被を着て、会場を走り廻りました。※「両協会」の会長並びに幹部の方々、南陽市々長、そして山形出身の伴淳三郎先生、四十七代横綱 柏戸関、其はそれは華やかな顔ぶれでした。そんな中を、大雨の為でしょう、作務衣にゴムの長靴を履いた、桂伸治(昭和54年3月 十代目桂文治襲名)師匠が、弟子を1人伴って会場玄関に現れたのです。私はエッ!と思いましたが、弟子に雪駄を出させ、ゴム長を脱ぐと白足袋を穿いていて、作務衣の様なもの下には、黒羽二重の五ツ所紋付に仙台平の袴を着けていると言う、まるで、007のジェームズ・ボンドが、ウエットスーツを脱ぐと下に、タキシードを着ている様な映像で“噺家らしいナ”と、ほとほと感心しました。そのくらいですから、披露宴会場は、さぞ華やかだったと思いますが、私は案内係でしたから、中の様子は分かりません。マア減多に出来る経験では在りませんから……。その賑かな披露宴が済んで、その年の4月21日から、新宿末廣亭をかわきりに、東京に有る五ツの定席を廻る訳ですが、この出費がまた大変で、各興業ごとに前座さん、三味線のお姐さんを含めて、全員へのご祝儀と楽屋弁当を配り、その上毎晩の打ち上げのお酒をご馳走すると言う、どれほどお金が掛かったのですかね! ? 私の役は、一興業が終わりまして、次の芝居の為の移動のお手伝い。これは、お祝いに頂いた後幕、^{うしろまく}四斗樽、^{しと}着物、帯等を運ぶのですが、力仕事^{おも}が主ですから、その辺は重宝がられたと思います。また、さい善のトラックを出した事も2度有りました。流石に、地方興業のお手伝いのご勘弁願いました。もう50年近く前の話になりますネ。只ただ懐かしいです。昭和44年は、私が大学を卒業した年で、当然就職先を決めなければならない訳ですが、先ず、さい善からの引き抜きが在りました。何しろ私は、一人っ子なので、親としては跡を継ぐ者と思っていた様ですが、昭和43年の10月だったと思います。私は母に「噺家に為りたいのですが」と意を決して打明けますと、母は涙を溜めた目で、私の顔をジッと視^みまして「私は、お前を……育てた覚えは在りません。趣味で遣るのは認めますが、本職になるのは絶対に許しません!!」と、強い口調でキッパリと否定されました。噺家さん達には、親不孝だから止めなさいとは、言われてましたが、この時、アアやっぱり親不孝なんだナ、との実感が湧いて来て、自然に諦める事が出来たのです。この辺が今一ツ強い意志が欠けていたのかなと思いますが、今では、本職にならずに良かったと強く思います。母の「趣味は認めます」の言葉通り、これは趣味なのだ!と心に決めて、その道を歩んでおります。只、中途半端で終わらせるのは嫌ですから、それなりの高みを目指して頑張ろうと思っております。10年以上前になりますが、学生の頃から親交の在る、他大学出身の高名な噺家さんから、「小疇さん、退職してから、噺家になろうな

なんて思わないでしょうネ!？」と言われた事が在りますが、今では絶対にならないと言いきれます。なるんでしたら、50年前に成っていますヨ。話が逸れましたが、その母との結論を扇馬師匠に報告した処、師匠は「それは残念だが、当然だと思ふ。俺はお前を生涯弟子だと思っているから、これからも家に通つて来い」と言われ、本当に有難い事だと、今でも感謝してしております。しかし、さい善に入ってから3年間は、仕事を覚える為に、落語との関りを断ったのですが、3年過ぎての昭和47年6月に、圓馬大師匠のお弟子さんの、喜久馬(後の左圓馬)さんから「オカミさんが会いたがってるヨ」と言われ、禁も解けたので、こちらから連絡を執り、浅草のスナックで再会をしたのです。本当に久し振りだったので、オカミさんと抱き合つて感涙にむせびました。テか!？その時には、私も結婚しており、当然家のカミさんも、圓師匠を知っておりますから、こちらも二人連れでの再会でした。それから又、圓師匠のお宅へ通う様になったのですが、住居も六畳一間のアパートから、千駄木の戸建に移っており、オカミさんも、三崎坂から入った夜店通りに面した場所に“お握り屋”を出しておりましたので、師匠に会いに行く時はそのお店に、又、お稽古も奥の座敷で付けてくれる様になったのです。まだ小さくて、六畳一間の中で三輪車に乗っていた、長女の順子ちゃんも小学生になり、次女も生まれて、時の流れを感じたものです。それからは、今までの時間を取り戻すかの様に、千駄木に通い、随分噺を付けてもらいました。数えてみますと、今、60以上の根多が在りますが、やはり、圓師匠からの噺が1番多く、16になります。千駄木に通う頃には、録音も許されて楽にはなりましたが、緊張感が薄れ、何ンとなく寂しい気もします。次回は、その圓師匠から教わりました16の噺の解説をしたいと思ひます。お楽しみに。

「落語豆知識」

※「両協会」

圓師匠が真打になった、昭和44年には、落語協会と落語芸術協会の二協会しか存在しませんでした、平成30年2月現在では

- 1、一般社団法人 落語協会
- 2、公益社団法人 落語芸術協会
- 3、五代目圓楽一門会
- 4、落語立川流

の4団体が登録されております。

先ず、明治中期に、三遊派と柳派の派閥が誕生、次に大正6年、三代目柳家小さんを中心に「東京寄席演芸株式会社」設立、これに反対した、五代目柳亭左楽らが、「落語睦会」を旗揚げ、大正15年東京寄席演芸(株)が、諸派を併合して「東京落語協会」を設立、これが現落語協会の前身です。

- 1、(社)落語協会 会長 四代目柳亭市馬
副会長 九代目林家正蔵

真打 201名 二ツ目 50名 前座 27名 合計 278名

この併合に、落語睦会だけが残り、昭和5年「日本芸術協会」を立ち上げて、これが今の落語芸術協会です。

2、(益)落語芸術協会 会長 桂歌丸

副会長 三遊亭小遊三 春風亭昇太は、理事です。

真打 98名 ニツ目 44名 前座 25名 合計 167名

昭和53年5月、六代目三遊亭圓生の落語協会脱会で、五代目三遊亭圓楽を中心に、圓生の弟子達で落語三遊協会を設立、圓生没後、大日本落語すみれ会から、圓楽一門会へと移行するのです。

3、五代目圓楽一門会 会長 三遊亭好楽 副会長 三遊亭楽之介 六代目圓楽は、幹事長です。

真打 37名 ニツ目 13名 前座 10名 合計 60名

六代目圓生協会脱会時に、共に協会を離れた立川談志は、結局すぐに落語協会に戻り、その5年後、又落語協会を出て、落語立川流を旗揚げ。

4、落語立川流 会長 十代目 ^{どきょうてい}土橋亭 ^{りゅうぼ}里う馬 立川志の輔は理事です。

真打 37名 ニツ目 13名 前座 10名 合計60名

この様に、落語界の離合集数は数多く在りますが、これは、噺家はピン芸で、最終責任は自分に在るとの意識が強く、自己主張の現われですかネ！？

